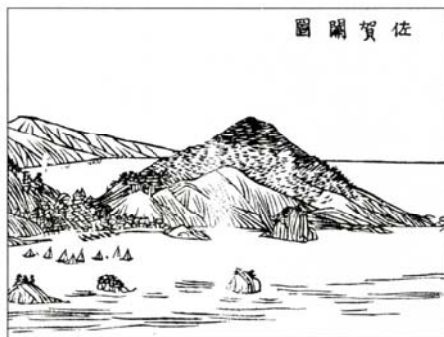


● 資料紹介

日本地誌略図「佐賀之関」

豊後佐賀関を描いた錦絵。題言に「日本地誌略図」とあり、右下余白に「六十六」の数字が刷られていることから、上記シリーズの一図として制作されたと考えられます。作者は、「広重」の署名と余白左上に押された明治9年の「御届」印から、明治時代に多くの「開化絵」を描いて人気を博した三代歌川広重（1842-94年）と考えられます。

明治7年文部省が編集した小学校用日本地理の教科書に『日本地誌略』があります。この本の「巻之三」豊後国には、「東北ハ、海ニ臨ミ、西南ハ、豊前、筑前、筑後、肥後、日向、ニ界ス」、「竹田岡ノ城市アリ、共ニ山間ノ小都會ナリ」、「臼杵、佐伯ノ城市アリ、此際、漁利殊ニ盛ナリ」、「杵築、日出、別府、府内、鶴崎ノ諸城市ハ、皆湾上ニ在リテ、共ニ泊舟ノ地タリ」、「佐賀ノ関モ亦、泊舟ノ地ニシテ、遠ク海中ニ突出ス、其岬端ヲ、地藏カ崎ト云フ、伊豫ノ御前崎ニ對シ、相距ルコト、六里ナリ」とあります。これらの記述は本図中央の説明書きとほぼ同様で、また、本図と同じ構図の「佐賀関図」も載せられています。ですから、本図は三代広重が、恐らく『日本地誌略』に掲載された原画をもとに、市販もしくは教材用として描き直したものと考えられます。



『日本地誌略』

● 行事案内

テーマ展示

- 第2回 杵原さまのお祭り一浜の市と賀来の市
 - 期 間 平成11年9月26日まで
 - 内 容 豊後国一宮であった杵原八幡宮の二つのお祭り一浜の市と賀来の市を紹介しています。

● 編集後記

今年の梅雨は後半ほとんど雨が降らず、このまま暑い夏に突入するかと思いきや、梅雨明けと同じ、週末になると台風がやってきて雨ばかり。変な天候です。かと思うと、出張で

行った東京は猛暑続き。そのせいかわかりませんが、若い女性が昼間浴衣を着て街中を歩いていました。ファッションなのでしょうか。東京はいつ行っても変な街です。(H.O)

各種講座

- 夏休みジュニア講座
 - 期 間 平成11年8月3日～5日
 - 時 間 13:00～16:00
 - 内 容 土器の復元を体験し、実際に土器作りに挑戦します。

資料館ニュース No.47
発行 1999.7.30

大分市歴史資料館
大分市大字国分960番地の1
〒870-0864 ☎(097)549-0880



大分市 歴史資料館ニュース

OITA CITY HISTORICAL MUSEUM NEWS



三採貼花文五耳壺（トラディスカント壺）

トラディスカント壺

時は戦国時代、各地の武将が天下統一をめざし群雄割拠する中、東九州では大友宗麟が勢力を張っていた。まさにその時代、この壺は豊後の地に渡ってきました。

口径12.8cm・高さ31.4cm・底径16.4cm・胴部最大径28.0cmを測り、大きく膨らむ胴部をもつ壺形をしています。頸部には縦方向に2条の深い溝をもつ耳が5つ付けられ、表面には花や蔓・葉などの文様が貼付けられています。こうした型押しされた文様を貼り付ける技法を「貼花」といいます。文様は大きく4側面に展開し、宝相華文を中心にしたもの・花弁文を中心にしたものの2種類に分けられます。蔓は上下に渦を巻きながら胴部を一周し、それに葉、またはゼンマイ状の子葉が貼り付けられ、下部には蓮弁文が均等に配されています。壺全体には深い緑色、そして、文様部分に鮮やかな黄色と褐色、と三色の釉薬がかけ分けられています。

この独特な三彩貼花文五耳壺は、イギリス人コレクター、ジョン・トラディスカントの名に由来して、今日「トラディスカント壺」の名で呼ばれています。彼は東南アジアに住み、この種の壺をヨーロッパに持ち帰りました。それが現在イギリスのアシュモレアン美術館に所蔵されています。彼は寄贈後、1627年に没しており、それ以前に生産されたことは確実です。最近の研究では、各地の出土事例から16世紀末頃に中国南部・華南地方で生産されたものと考えられています。国外では上記以外にインドネシア国立博物館・オランダのプリンセスホフ美術館に収蔵されています。国内では東京・京都・奈良・大阪・堺・長崎・大分などの当時の大名や商人に関わる地域で出土しており、伝世品では、東京国立博物館・彦根の井伊家・小松市の寺の所蔵品が知られています。大分市内の寺院に伝わる本品（当館寄託）は、数少ない伝世品の一つとして、また、当地の出土遺物と関連して、戦国期の大友氏の南蛮貿易を物語る

遺品として貴重です。

同寺院にはもう一点、陶器漆壺が伝わっています。これは、幅が狭く高い削り出しの高台をもち、胴部はゆるやかな曲線を描き、口縁部はやや外に湾曲しながら短く伸びています。口径13.7cm・高さ36.7cm・底径15.6cm・胴部最大径23.6cmを測る長胴の壺形をしています。胴部の一側面のみ文様があります。文様は右上がりに船形状の枠を設け、その中を五等分に区画し、さらに中央の区画を上下二等分し文様を削り出しています。中央下の文様は直線的な斜交文で表し、上は曲線的な斜交文で表されています。中央左の区画には亀甲文が、右側の区画には四葉座文が表現され、尖った両側の区画には、中央に円形を削り出し、その周りに左右対称となるような菱形文が配されています。そして、全面に漆が塗られています。現在のところ、同じような壺は見つかっていません。まさに漆という神秘的ベールに包まれた壺といえます。



陶器漆壺

壇ノ下共同墓地

壇ノ下共同墓地は大分市上野丘1-8に所在しています。壇ノ下共同墓地維持会の方から無縁仏の墓石などを整理されるとの連絡があり、5月から数度にわたって調査を実施しました。

調査は、整理される南西側の墓石群とその北側に集まる墓石群、およそ170基について主に墓石の形態・銘文を調べています。

調査した墓石群は、近代以降に新しく建てられたお墓に方向などを規制されて建てられており、後に移動させられたことがうかがえ、造営当初の位置は保っていないと考えられました。墓石の形は、板碑形（上部が三角形を呈し、奥行きが薄いもの）・位牌形（上部が半円形を呈すもの）・方柱形（水平断面がほぼ正方形を呈すもの）・光背形（仏像を半肉彫するもの）・石殿形（墓石本体の外部施設）などに分けられます。当墓地においては現時点で「天和二壬戌年（1682年）」の銘をもつ板碑形のものも古いようです。板碑形のもは、墓石全体の中で量的にも少ないですが、その造りは丁寧で比較的大形のものが多いです。位牌形は、全体の7割近くを占め、「貞享二年（1685年）」銘のものを初現に明治のはじめ頃まで連続して見られます。方柱形のもは、「文政四辛巳年（1821年）」銘を初現に安政年間

（1854～59年）から急増していきます。以上のことから、板碑形→位牌形→方柱形への大きな流れが読み取れます。この変化は、これまで明らかにされた大分県内の近世墓の形式変化と一致しています。

光背形は元禄～天保年間（1688～1843年）にかけて散発的に造られているようで、石殿形も3基と少なく、これらは特別な墓、あるいはある特定身分の人達の墓としての可能性が考えられます。この他、五輪塔の破片が散在しており、墓地の造営自体は、さらに遡る可能性が考えられます。また、墓地の南側、入口付近に宝篋印塔があり、寛政9年（1797年）に府内福寿院の了義和尚が金剛宝戒寺と戒壇院の霊場の由来について記しています。

明治初期に編纂された『雉城雑誌』によると「当地は西大寺の幸尊律師が建てた戒壇所のあった所で、当時は常に遠方からも受戒の僧徒の姿があったとされるが、今では近くの村の墓所となって、村人から壇の本と伝えられている」としており、地名の壇ノ下は戒壇所から名づけられたと考えられます。

今後、墓石の形態と戒名との相関関係などを調べることで、実態がより明らかになると思われます。



壇ノ下共同墓地現景



寛政9年の宝篋印塔

霊山周辺の史跡



高瀬石仏 (国指定史跡) 高さ約1.8m、幅4.4m、奥行1.5mの石窟内に、大日如来(胎藏界)を中心に馬頭観音、如意輪観音、大威徳明王、深沙大将の5体の石仏が掘り出されている。伝統的な仏教教義を無視した石仏の構成や、藤原様式を思わせるやや丸みを帯びた造形などから、平安時代後期、12世紀後半頃の作りとみられている。とくに、胸にドクロの首飾りをつけ、両足と左手に蛇を絡ませた深沙大将像は、唐の玄奘がインドに仏典を求めたときこれを守護した鬼神といわれ、全国的にも作例が少なく、注目されている。

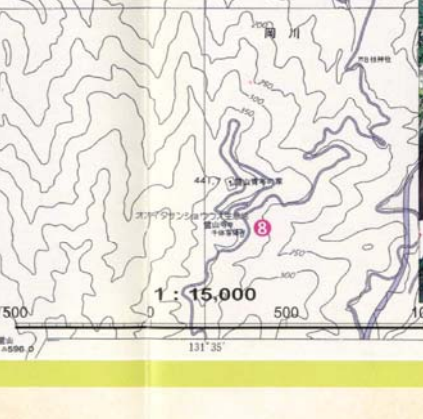


高瀬横穴墓群 高瀬石仏のある谷筋の向かい側丘陵斜面に十数個、また石仏の裏側丘陵斜面に数個みられる。横穴墓は6・7世紀頃の有力農民層の墓と考えられているもので、同地の開発年代を考える上で貴重な遺跡とされている。



日枝神社 大山昨命・大己貴命の二神をまつり、宝治2年(1248)の創建と伝えられる。祭神は何れも比叡山の守護神として敬われている日吉大社の祭神で、霊山寺の守護神として同社から勧請されたものとみられている。

孝子塚 延岡藩高城村の百姓、永富金左衛門(1703-65年)の生前の行状を顕彰・記念し、天保14年(1843)金左衛門の子孫等によって建立された。金左衛門は、寒い日には自らの衣服を脱いで父母にこれを着せ、寺参りんの不自由な両親のために妻の着物を売り払い一体の仏像を求めたり、また父の病気に効用があると聞いては激寒の川に入って鴨を捕られ食べさせるなど、稀にみる「孝行者」として、延享2年(1745)藩から表彰を受けた。彼の行状は、三浦梅園によって著書「偷婉録」(1783年著)の中でも紹介され、中国二十四孝にも劣らないと賞賛されている。また、天保14年にも高松代官安東仁兵衛から銀1貫文が孫の金左衛門に与えられ賞されており、本孝子塚は、これを記念して建てられたものとみられる。



常楽寺 正安2年(1300)に大友氏三代頼泰が創建したと伝えられる臨濟寺院(妙心寺派)。頼泰の死後、その菩提寺となる。大友氏の改易以降、寺は一時衰退したが、元禄年間に「孝子」金左衛門を出した永富家から入寺した笠雲禪師によって再建されたといわれる。同寺には、頼泰の成名(「常楽寺殿道忍公大禅定門」)を刻んだ位牌の他、大友系図(大友氏22代吉統の次男正照の末流、松野家に伝えられたもので、明治になって常楽寺へ納められた)などの大友家ゆかりの品が伝えられている。



不動寺 霊山寺参道入口の道路右側にあり、室内には凝灰岩で造られた高さ約2mの不動明王がまつられている。文化11年(1814)大野郡田中町の不動明王を分霊し建立したといわれ、建立当時は付近の別の場所にあったが、道路工事等で現在地へ移されたものといわれている。境内には、「飛来山霊山本堂迄十八丁」と刻まれた文化2年(1805)の道標や、寛保3年(1743)奉納の「西国順礼三十三所成就供養宝塔」など、霊山寺に関連する石造仏が残っている。



霊山寺 標高596mの霊山の中腹にある天台寺院(延暦寺派)。推古天皇の治世(592-628年)に、同地の豪族、大神七郎祐世が山中より十一面観音像を発見し、草堂を建てたのがその起こりといわれる。その後、弘仁5年(814)同地を訪れた伝教大師(最澄)が、飛来山霊山寺と名づけ、伽藍を創建させたという。また一説には、渡来僧の那伽なる者が伽藍を創建したとも伝えられるが、その本格的な創建の時期は、国東六郷山の天台化が行われる11世紀末~12世紀の頃と考えられている。最盛期には寺院・僧坊は30を越えたが、天正14年(1586)の島津軍の豊後進攻で戦禍にあい、わずかに観音堂を残すのみとなったが、元和9年(1623)越前北ノ庄から豊後萩原(後に豊後津守へ移転)に配流となった松平忠直(一伯)によって、寛永年間1624~1643)に本堂・山門等が再建され現在にいたっている。なお同寺は、江戸時代には筑紫西国三十三所の観音霊場の8番札所となっている。

高崎城と市内の山城(9) 松平忠直津守館

大分市津守にある松平忠直（一伯）の津守館は、寛永3年（1626）に府内萩原館から移転して慶安3年（1650）9月10日に亡くなるまで住んだ居館です。

松平忠直は、文禄4年（1595）に結城秀康（徳川家康の二男）の長子として生まれ、慶長12年（1607）父秀康を継いで福井68万石の領主となりましたが、元和9年（1623）突然豊後国萩原へ賄料5000石で蟄居を命じられ、同年5月萩原館に入りました。配流の理由は忠直の不行跡とされていますが、将軍の近親者（忠直は家康の孫で、2代将軍秀忠の甥）でも容赦はしないという他の大名への見せしめであったともいいます。

津守館が存在していた地区の道路は現在も図示した明治期字図と大きな変化はありません。しかし、かなり家が建て混んでいて、館を推定させるものは「史蹟松平忠直居館址」の石碑のみです。『豊府古蹟研究』という雑誌に昭和6年当時の状況が次のように記されています。

「現在此の地は畠地となり、礎石等の遺物は何物をも留めて居ないので、邸宅の地域を明確に定めることは出来ないが、その地形が他とは一段小高くなって居るので、略それと察せられる。（中略）西境の村道より東へ約五十九間三尺、北境の村道より南へ約七十二間四尺の間、一面の小高い畠地約四千三百八十坪許が館址であるといふ。『村落歴代豊城世譜』に『津守の邸七反式畝廿四歩、坪数二千八百四坪、高七石六斗五升九合』とある（中略）館址西端の村道の辺は古の濠地で、現在その殆ど中間より館址畠址に通ずる小径があるが、その辺が古の正門址であり、畠地の上稍右寄りの地点に明治の頃迄廟所があったが、それは居館の居間にあたる地点を選んで、忠直没後に廟を営んだものと伝えて居る。而して裏門は館址の東北隅にあって、所謂馬場の名残れる村道に面して建ち（下略）」（『豊府古蹟研究3』、昭和6年）

字図から館址をみると、字御屋敷が館の中心であ

る事は以前からの推定通りでしょう。通常当時の館は方形に堀が取り囲む形が基本で、余り歪んだ例は少ないのですが、字御屋敷は西側部分が変形した逆台形で、字堀ノ内も字御屋敷を囲んでいません。現状では明確な堀の痕跡はうかがわれません。堀が後に水田化される例が多いので、字御屋敷の周囲で水田化されたところを探すと、西側道路沿いと北側道路北にあります。字堀ノ内には堀の痕跡を示す水田はありません。もう一つ堀の痕跡を示すと考えられる水路は北西南側道路に沿って認められます。東側については水田も水路もありますが、字図区割り堀の痕跡のようにも見えます。以上の区画内の大きさは南北112.5m、東西（北）120m、（南）92.5mとなり、ほぼ方一町に近い館であったと思われます。館の南には横小路・立小路という町を暗示させる字名も残っています。なお字庄ノ元は現在礎山にある熊野神社が鎮座していた場所です。



津守館付近の字図

入館者数の動向

歴史資料館は昭和62年4月に開館し、本年4月で満12年を迎えました。この間、入館者で35万人、講座室利用を含めた総利用者数では40万人を超えています。しかし、入館者数は開館以来減少傾向にあり、今回、15周年、20周年にむけた資料館の姿を考える材料として入館者数の動向に検討を加えてみました。

開館以来の年度別入館者数は図1のとおりで、減少を続けています。3回前年度を上回った年度がありますが、これは武漢物展・5周年記念展・10周年記念と、当館としては展示室のほぼ5分の4を使う大規模な特別展を実施したためです。最近の特徴としては、平成5年度以降は緩やかであった減少速度が昨年度加速されたことがあげられます。

入館者減少の大きな理由に、「いつきても同じ展示内容」があげられるでしょう。特に、当館のように大分市の歴史の流れを紹介する構成をとっている個々の展示品が変わっても、構成が大きく変更されない限り「同じ展示」との印象はぬぐえません。これを打開し、いわゆる、リピーターを確保するため、秋に1ヶ月程度の自主企画特別展と年4回2ヶ月程度のテーマ展を行ってきました。大規模な特別展を行えば入館者が増加するのは明らかですが、財政的に毎年実施するのは困難な状況です。そのため、常設展のみの期間

中入館者を減少させないよう、少しは違った資料・作品が年間をつづじ展示してある状況を作るため平成4年から始めたのがテーマ展です。これは、保護のため常設展に出していない収蔵品をテーマ別に展示する小企画展です。このテーマ展の効果を表1により見てみましょう。

年間入館者①から特別展入館者②を引いた③が常設展示のみ期間中入館者です。これを常設展示しか行っていない月数で割った④が常設展示のみを見に来た1ヶ月あたりの入館者数になります。この④は平成3年度まで減少していましたが、平成4年度からは増加し、平成8年度までは平成3年度の実績を上回って来ました。これはテーマ展効果のあらわれと言えるでしょう。しかし、その効果も平成9年度からはなくなり、平成10年度とうとう入館者が2万人を切った大きな原因となったと思われます。テーマ展は限られた収蔵品中心のため、数年に1度はほぼ同じ内容の展示になってしまい、あきられてきたのかもしれない。

入館者数つまり展示活動に限れば、当館は大きな曲がり角に差し掛かっていると言えるでしょう。今後21世紀を迎える新しい資料館の姿を館員一同で模索しなければなりません。

図1 年度別入館者数の推移

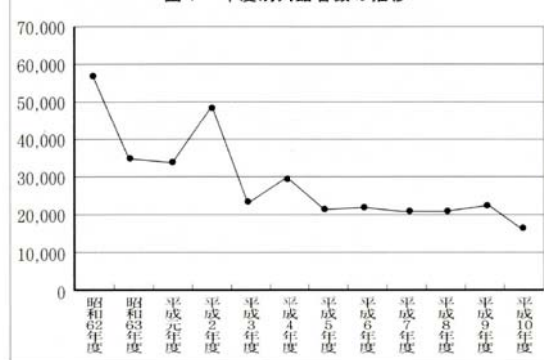


表1 常設展のみの入館者数 単位：人

年度	入館者数①	特別展入館者数②	①-② = ③	③/月数 = ④
昭和62年度	57,638	9,074	48,564	4415
昭和63年度	35,022	13,254	21,768	2177
平成元年度	33,684	16,564	17,120	1722
平成2年度	48,023	33,633	14,390	1439
平成3年度	24,023	11,844	12,186	1219
平成4年度	29,841	13,348	16,493	1499
平成5年度	21,920	5,017	16,903	1537
平成6年度	21,961	5,699	16,262	1478
平成7年度	20,788	4,901	15,887	1444
平成8年度	20,495	5,312	15,183	1380
平成9年度	22,114	10,126	11,988	1090
平成10年度	16,764	4,164	12,600	1145